いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響

蔵永　瞳・片山　香・樋口匡貴・深田博己

The effect of bystander's role-taking and sympathy on their behavior in the situation of bullying

Hitomi Kuranaga, Kaori Katayama, Masataka Higuchi, and Hiromi Fukada

大学生を対象に，いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が傍観者自身のいじめ関連行動に及ぼす影響について検討を行った。調査においては，役割取得と共感の対象として，いじめ場面における加害者，被害者，観衆，傍観者の4者を仮定した。243名を対象としたシナリオ法を用いた質問紙調査を行った結果，役割取得は加害者，被害者，観衆，傍観者の4者全てに対して生じていたのに比べて，共感は加害者，被害者，傍観者の3者に対してのみ生じていた。さらに，傍観者のいじめ関連行動には，「はやしたて行動」，「被害者援助行動」，「傍観行動」の3種類があり，このうち「はやしたて行動」はいじめ場面においては生じないことが示された。これらの変数を用いて因果モデルを検討した結果，いじめ関連行動に対して影響を持つのは，共感よりもむしろ役割取得であることが示された。また，傍観者に対する役割取得は被害者援助行動を抑制，傍観行動を促進し，それとは逆に被害者に対する役割取得は被害者援助行動を促進，傍観行動を抑制することが明らかとなった。

キーワード：いじめ，共感，傍観者，役割取得

問題

いじめは，その被害者に対して心理的・身体的悪影響を与える（坂西, 1995）。またそれだけでなく，共に日常生活を送る人々との対人関係において安全が保障されていないという認識は，いじめをとりまく多くの人々に対して悪影響をもたらすことが予想される（松尾, 2002）。すなわち，いじめはその被害者だけでなくそれに関わる全ての人々の問題でもある。これらの悪影響抑制のために，早急ないじめ対策の確立が必要である。

従来の研究における「いじめ」の定義をレビューした大野（1996）によると，いじめは「集団内で多数の者がある特定の者に対して一方的，継続的に行なう攻撃」と定義されるという。このような「いじめ」に関する研究においては，これまで加害者のいじめ行動の促進要因や抑制要因に関する検討が精力的に行われてきた（大坪, 1999）。

しかし，いじめ対策の確立にあたっては，いじめに関わる加害者のみならず，それ以外の人々に対する対策についても考えていく必要がある。なぜなら，加害者が自主的にいじめをやめようと思うのを待つ間にいじめが深刻化してしまう可能性があるからである（橋本, 1999）。近年のいじめの可視性の低下（大坪, 1999）からも，いじめを目撃した人々がその場で直接それに対応することがより早急ないじめ抑制につながる可能性は高い。

いじめに関わる人々は，直接いじめを行う「加害者」，加害者から直接いじめ行動の被害を受ける「被害者」，自分で直接手を下してはいないが，周りで面白がってはやしたてる「観衆」，見て見ぬふりをする「傍観者」の4者に類別される（森田・清永, 1994）。いじめ場面を目撃しつつもその時点で何もしていない者は，このうち「傍観者」に最も近い立場と言えよう。また，いじめの仲裁者は「傍観者」から分化する形で現れることや（森田・清永, 1994），「傍観者」の行動によって加害者のいじめ行動が変容しうることが指摘されている（森田・清永, 1994; 塚本・田名場, 2007）。これより，いじめに関わる4者の中でも，いじめを目撃しながらも特に何も行動していない「傍観者」がより積極的にいじめ解決に向けて行動するよう促すといういじめ対策は，実現可能であり有用であると考えられる。

傍観者のいじめ場面における行動を規定する要因として，共感があげられる。共感とは，“感情体験をしている他者に対して，相手と同様の感情が生じたり，相手の状況にふさわしい感情が生じること”であり（登張, 2005），利他的行動を促進することが実証されており（たとえばBatson, Duncan, Ackerman, Buckley, & Birch, 1981），攻撃行動を抑制することも指摘されている（Davis, 1994 菊池訳 1999）。このことをいじめ場面に適用すると，共感は被害者への援助を促し，加害行動への加担を抑制する機能を持ちうると考えられる。

しかし，他者に対する共感が常にいじめ被害者に対する援助を促進し，加害行動への加担を抑制するとは限らない。たとえば杉田・若松・杉山・菊地・片岡・菊池・寺田（1989）は，調査対象者にいじめ場面を呈示し，いじめ加害者に対する共感と，もし自身が加害者の立場であったら呈示された加害者と同じようにいじめを行うか否かを尋ね，それらの関連を検討した。その結果，いじめを行うと回答した群と，いじめを行わないと回答した群とでは，いじめを行うと回答した群の方がいじめ加害者に共感している者が多い傾向にあることが明らかになった。この結果は，加害者に共感した人々はいじめに加担しやすいことを示唆するものである。これより，誰に共感するかという共感の対象によってその後の行動は異なり，他者に対する共感が常にいじめ抑制につながるわけではなく，ある者に対する共感はいじめを抑制する一方で，ある者に対する共感はいじめを促進することが考えられる。前述のように，いじめ場面においては「被害者」，「加害者」，「観衆」，「傍観者」が存在するため（森田・清永, 1994），いじめ場面における傍観者の共感のはたらきを充分に捉えるためには，被害者，加害者，観衆，自身以外の傍観者それぞれに対する共感が，その後の傍観者自身のいじめ関連行動にもたらす影響を検討する必要があろう。

ただし，いじめ場面における傍観者の共感のはたらき，すなわち，どの対象に対する共感がいじめを抑制しうるのかが明らかになったとしても，その知見だけでは実際のいじめ対策には繋がりにくい。なぜなら，感情反応である共感は，自動的に生じるモードであるからである（Hodges & Wegner,

1997; 登張, 2005)。たとえば「意図的に被害者に共感するように」促されたとしても，それだけで単純に被害者に共感するようになるとは言えないだろう。そこで本研究では，従来多くの研究において共感の重要な先行要因として取り上げられており（たとえば Hoffman, 1990; Davis, 1994 菊池訳 1999, 登張, 2005），“相手の立場に立って相手の気持ちを想像する”（登張, 2005）という意図的に生じるモードである（Hodges & Wegner, 1997; 登張, 2005）「役割取得」を共感の先行要因として取り上げる。

この「役割取得」に関しても共感と同様，役割取得する立場として，加害者，被害者，観衆，傍観者の 4 者が想定される。また，どの立場の者の気持ちを想像するかによって，どの対象に対して共感しやすくなるか，どのような行動をその後とりやすいかが異なると予想されるため，役割取得に関してもその立場の多様性を考慮した検討が必要であると考えられる。

以上より本研究では，いじめ場面における共感対象として，「加害者」，「被害者」，「観衆」，「傍観者」の 4 者を仮定し，それら 4 者に対する共感がその後の傍観者自身のいじめ関連行動にもたらす影響を明らかにする。また，各対象に対する共感が，「加害者」，「被害者」，「観衆」，「傍観者」のどの立場への役割取得によってもたらされているかを検討する。さらに役割取得はその後の傍観者自身のいじめ関連行動にも影響する可能性があるため，これらの関連についても検討を行う。以上の検討によって，「傍観者にどの立場の者の気持ちを想像するよう促すことがいじめ対処にあたってより効果的であるのか」という，傍観者に対するより具体的ないじめ対策を示すことが出来るだろう。

方法

対象者と手続き

大学生 243 名（男性 67 名，女性 175 名，不明 1 名; 平均年齢 20.4 歳）を対象に，集合調査法による質問紙調査を実施した。調査では，いじめ場面のシナリオを呈示し，その後役割取得，共感，いじめ関連行動に関する質問についてそれぞれ回答を求めた。

呈示場面

従来のいじめ研究（熊谷, 2006; 清水・瀧野, 1998; 杉田ら, 1989; 竹ノ山・原岡, 2003, 塚本・田名場, 2007）のシナリオを参考に 4 種類の場面を作成した。呈示する場面を複数作成したのは，典型的ないじめ場面を 1 場面呈示した場合，回答時に調査対象者が社会的望ましさを意識し，被害者に対する役割取得および共感のみが生じたと回答する場合があると考えたためである。このことを避けるために，本研究では被害者，加害者，観衆，傍観者それぞれに関して役割取得および共感が生じやすい場面を各対象につき 1 場面，計 4 場面作成し，調査で用いることとした。呈示したシナリオを Figure 1 に示す。調査においては，1 人の調査対象者に対してそのうち 1 種類のシナリオを呈示した。またシナリオの登場人物については，調査対象者と同性であると想定するよう求めた。

質問項目

役割取得　いじめ場面における加害者，被害者，観衆，傍観者の 4 者それぞれの立場の気持ちを想像したかどうかについて，各立場につき 2 項目，計 8 項目の質問項目を作成し，「違う」～「その通り」の 5 段階（1~5 点）で評定を求めた。使用した項目を Table 1 に示す。

共感　いじめ場面における加害者，被害者，観衆，傍観者の4者それぞれの対象と同じ気持ちを感じたかどうかについて，各対象につき3項目，計12項目の質問項目を作成し，「違う」～「その通り」の5段階（1～5点）で評定を求めた。使用した項目をTable 2に示す。

いじめ関連行動　従来のいじめ研究（橋本, 1999; 清水・瀧野, 1998; 塚本・田名場, 2007）を参考に傍観者がいじめ場面においてとりうる行動として16項目を作成し，自身が呈示された場面におかれたとしたらそれぞれの行動をその後とるかどうかについて，「違う」～「その通り」の5段階（1～5点）で評定を求めた。使用した項目をTable 3に示す。

ある時，あなたはAが，Aと普段から仲のいいBたちに無視されているのを目撃しました。
というのも，Aがいくらたちに挨拶をしたり，話しかけても，Bたちは知らんぷりをして相手にしないのです。
実際に，Bたちがある話題で盛り上がっているときに，Aが入っていこうとすると，Bたちが急に話をやめ，そっぽを向いてしまうということがありました。このときこの状況を見た周りの誰かが「シーン」と言ってはやしたてると，みんなどっと笑いました。周りには，見てみぬふりをする人もいました。
それからすぐに話題が変わり，Bたちは他の話題を話し始めました。

＊シナリオA～Dのうちいずれか1種類を挿入

シナリオA（被害者に対する役割取得および共感の喚起）
Aは，なぜ仲の良かったBたちが自分を無視するのか，どんなに一生懸命考えてみても思い当たる節がなく，原因が思い浮かびません。
自分では以前から同じ行動を取っているつもりなのに，突然Bたちに無視され始めたのです。
Aはどうしていいのか分からず，途方にくれているようです。

シナリオB（加害者に対する役割取得および共感の喚起）
このようなことになった原因には，AがBたちとの約束を何度もやぶっていたということがあるようです。
例えば，Aは，待ち合わせ時間を何度もすっぽかしたり，Bが大切にしているCDを約束の期限に返さないということを繰り返していたようです。
BたちはAのだらしない性格やいい加減な行動に迷惑をかけられているのです。

シナリオC（観衆に対する役割取得および共感の喚起）
この集団にはいつも，なんでも笑ってみんなを盛り上げようという雰囲気があります。
なので，どんなに些細なことでも取り上げて笑ったり，ふざけたりすることで，その場を盛り上げようとする人がたくさんいます。
この集団では，このようなことが習慣的に行なわれているのです。

シナリオD（傍観者に対する役割取得および共感の喚起）
実は，無視されているのはAだけでなく，つい先日まではCが，その前にはDが無視されていました。
Bたちは気に入らない人をターゲットにしては皆を巻き込んで無視をすることを繰り返していて，無視される人が順番に回っている状態です。
そのため，周りには誰かが無視をされていても，関わらずに黙っている人がたくさんいます。

Bたちはその後もAを無視し続けています。

Figure 1.　調査において使用したいじめ場面のシナリオ

Table 1　役割取得の測定項目

立場	質問項目
加害者	Bたちの立場に立とうとした
	Bたちはどのような気持ちだろうと想像した
被害者	Aの立場に立とうとした
	Aはどのような気持ちだろうと想像した
観衆	周りではやしたてる人の立場に立とうとした
	周りではやしたてる人はどのような気持ちだろうと想像した
傍観者	周りで見てみぬふりをする人の立場に立とうとした
	周りで見てみぬふりをする人はどのような気持ちだろうと想像した

Table 2　共感の測定項目

対象	質問項目
加害者	Bたちの気持ちが分かる
	Bたちに共感を覚える
	Bたちが感じている気持ちと同じ気持ちを感じる
被害者	Aの気持ちが分かる
	Aに共感を覚える
	Aが感じている気持ちと同じ気持ちを感じる
観衆	周りではやしたてる人の気持ちが分かる
	周りではやしたてる人に共感を覚える
	周りではやしたてる人が感じている気持ちと同じ気持ちを感じる
傍観者	周りで見てみぬふりをする人の気持ちが分かる
	周りで見てみぬふりをする人に共感を覚える
	周りで見てみぬふりをする人が感じている気持ちと同じ気持ちを感じる

Table 3　いじめ関連行動の測定項目

Aのそばにいてあげる	周りにいてはやしたてる
Aの話を聴いてあげる	周りにいてAが無視されるのを見て面白がる
Aを避ける	周りにいてAが無視されるのを見て楽しむ
Aをなぐさめる	何もしない
Bたちと一緒にAを無視する	ただ見ている
Bたちに同調する	見てみぬふりをする
Bたちに1人でやめるよう言う	誰かと仲裁する
Bたちに誰かとやめるように言う	1人で仲裁する

結果

測定した各概念の構造の検討

役割取得と共感に関しては，既に「加害者」，「被害者」，「観衆」，「傍観者」の 4 者別に測定しているため，構造の検討は行わず，それぞれその 4 種類を仮定することとした。

いじめ場面に遭遇した傍観者のいじめ関連行動に関して探索的因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った結果，ガットマンルールにより 3 因子解が採択された。単純構造を目指すため，共通性が 0.3 以下の項目と，最も因子負荷量の絶対値が大きい因子に対する因子負荷量の絶対値とその他の因子に対する因子負荷量の絶対値との差が 0.1 以下の項目は除外した。最終的な探索的因子分析の解における回転前の累積寄与率は 62.22%であった。この結果を Table 4 に示す。第 1 因子は，いじめを面白がったり，はやしたてる内容の項目から構成されていたため，「はやしたて行動」と命名した。第 2 因子は，被害者をなぐさめたり，いじめを仲裁する内容の項目から構成されていたため，「被害者援助行動」と命名した。第 3 因子は，いじめをただ見ていたり，無視するといった内容の項目から構成されていたため，「傍観行動」と命名した。

Table 4　いじめ関連行動の探索的因子分析結果

項目	因子負荷量 F1	F2	F3	h^2
F1: はやしたて行動　(回転前の固有値: 4.765)				
周りにいてAが無視されるのを見て面白がる	**.913**	-.066	-.107	.777
周りにいてAが無視されるのを見て楽しむ	**.885**	-.034	-.083	.737
周りにいてはやしたてる	**.716**	-.005	.024	.528
Bたちに同調する	**.499**	.070	.352	.487
F2: 被害者援助行動　(回転前の固有値: 2.588)				
Aをなぐさめる	-.038	**.714**	.119	.445
Bたちに誰かとやめるように言う	.104	**.666**	-.040	.465
誰かと仲裁する	.042	**.656**	-.072	.476
Aの話を聴いてあげる	-.194	**.636**	-.007	.473
Aのそばにいてあげる	-.020	**.570**	-.092	.389
F3: 傍観行動　(回転前の固有値: 1.358)				
見てみぬふりをする	-.115	.003	**.779**	.546
ただ見ている	-.115	-.145	**.747**	.626
Bたちと一緒にAを無視する	.226	.124	**.641**	.511
何もしない	-.006	-.226	**.572**	.502
Aを避ける	.316	.103	**.467**	.393
因子間相関	F1	F2	F3	
F1	—			
F2	-.103	—		
F3	.400	-.488	—	

次に，測定した4者に対する役割取得や共感がいじめ場面において生じていたのか，また，いじめ場面に遭遇した傍観者のいじめ関連行動として得られた3種類の行動がその後起こりうるのかについて検討を行った。以下に具体的な手順を示す。(1) 測定した項目ごとに床効果を検討した。床効果の基準としては，平均値から標準偏差を減じた値が調査において理論的な最小値である1以下であった場合には，床効果があるとみなした。(2) 各立場に対する役割取得，各対象に対する共感，各いじめ関連行動を構成する項目群のうち，過半数の項目に床効果があったものに関しては，いじめ場面においては生起しないと判断した。以上の作業の結果，役割取得は4者全てに対して生じており，共感は観衆に対しては生じず，加害者，被害者，傍観者の3者に生じていたことが示された。さらに，傍観者のいじめ関連行動に関しては，「はやしたて行動」は起こらず，「被害者援助行動」と「傍観行動」が起こりうることが示された。

共感が生じていじめ関連行動に至るまでの因果モデル

傍観者の役割取得や共感がいじめ関連行動にもたらす影響を検討するため，共分散構造分析を行った。モデルを作成するにあたって，各変数の平均値と標準偏差，Cronbach の α 係数を算出した。それらの値をTable 5に示す。検討の結果，はやしたて行動と4者に対する役割取得に関しては αs<.66と充分な内的一貫性は得られなかったものの，その他の変数に関しては充分な内的一貫性が示された。そこで，モデル作成にあたっては希薄化防止のため充分な内的一貫性が示された変数のみ観測変数を用い，充分な内的一貫性が得られなかった変数に関しては潜在変数を用いることとした。なお，モデル作成の際には前述の検討によっていじめ場面において生起しないと判断された「観衆に対する共感」と「はやしたて行動」はモデルから除外した。

Table 5　各変数の平均値と標準偏差，α係数

変数	平均値	標準偏差	α係数
役割取得			
被害者	3.51	1.05	.66
加害者	2.83	1.07	.52
観衆	2.12	1.00	.65
傍観者	2.77	1.15	.65
共感			
被害者	3.14	1.02	.81
加害者	2.32	.97	.85
観衆	3.14	1.02	.85
傍観者	3.44	1.08	.85
いじめ関連行動			
はやしたて行動	1.64	1.14	.26
被害者援助行動	3.10	.81	.79
傍観行動	2.62	.84	.81

共分散構造分析にあたっては，各立場への役割取得から，各対象への共感，各種のいじめ関連行動に対してパスを仮定し，各対象への共感から各種のいじめ関連行動に対してパスを仮定した上で，モデルを単純化するため，ワルド検定によって有意でないパスを削除した。単純化したモデルでは満足しうる適合度が得られなかったため，想定出来る範囲内での誤差間相関の仮定および誤差分散の制約によって，モデルの修正を行った。計 8 箇所の修正の結果，GFI=.920, AGFI=.852, RMSEA=.086 と許容範囲の適合度が得られた。最終的に得られた結果を Figure 2 に示す。

共分散構造分析の結果，共感に関しては，傍観者に対する共感が傍観行動を促進していたのみで，被害者や加害者に対する共感はいじめ関連行動には影響していないことが示された。

一方役割取得に関しては，被害者に対する役割取得と傍観者に対する役割取得がいじめ関連行動に直接影響を与えることが示された。このうち，被害者に対する役割取得は被害者援助行動を促進，傍観行動を抑制するのに対して，傍観者に対する役割取得は被害者援助行動を抑制，傍観行動を促進していた。さらに観衆に対する役割取得は，傍観者に対する共感を抑制することによって，間接的に傍観行動を抑制していた。また，加害者に対する役割取得は加害者に対する共感を促進していたが，加害者に対する役割取得と共感はいずれもいじめ関連行動とは有意な関連がみられなかった。

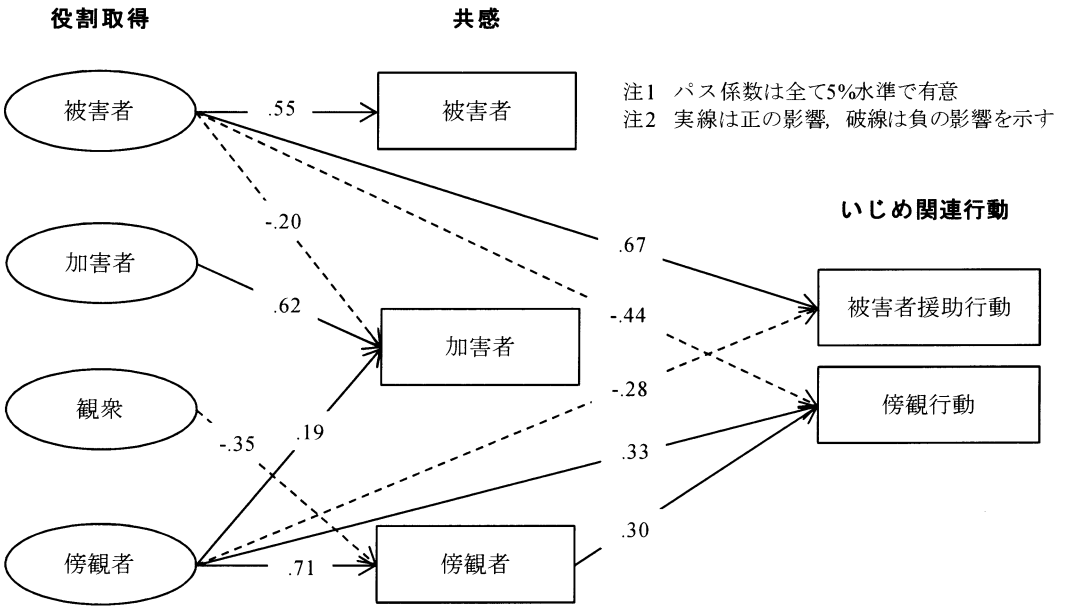

Figure 2. 共感が生じていじめ関連行動に至るまでの因果モデル

考察

本研究の目的は，いじめ場面における被害者，加害者，観衆，傍観者の4者に対する役割取得から共感が生じ，いじめ関連行動に至るまでの因果モデルを明らかにすることであった。以下ではここまでの検討によって示された，いじめ場面における傍観者がいじめ関連行動に至るまでの過程について考察を行う。

いじめ場面において生じる役割取得，共感，いじめ関連行動

本研究による検討の結果，いじめ場面においては被害者，加害者，観衆，傍観者の4者に対する役割取得と，被害者，加害者，傍観者の3者に対する共感が生じており，いじめ場面に遭遇した後には被害者援助行動と傍観行動が起こりうるということが示された。一方で，観衆に対する共感とはやしたて行動に関してはいじめ場面において生起しないことが示された。この結果は，いじめ場面に遭遇した傍観者は，観衆の気持ちは想像しているものの，その気持ちに共感することはないということ，また，いじめ場面に遭遇した傍観者はいじめに加担するような行動をとらないということを意味する。この理由としては，調査において用いたシナリオの記述の中に，調査対象者自身とその他の登場人物との関係が明確に示されていなかったことがあげられる。観衆や加害者と調査対象者とが親密である場合など，調査対象者とその他の登場人物との関係によっては観衆に対する共感や，はやしたて行動が生じる場合もあるかもしれない。この点に関しては，後述するように検討課題の1つである。

共感が生じていじめ関連行動に至るまでの過程

役割取得，共感，いじめ関連行動の因果モデルを検討した結果，いじめ関連行動に対して影響を持つのは，共感よりもむしろ役割取得であることが示された。これより，いじめ場面においては，他者と同様の，もしくはその他者がおかれている状況にふさわしい感情体験を経験しなくとも，他者の気持ちを想像することによって，いじめ関連行動が促進または抑制されるのだと言える。

さらにより細かく結果を読み取ると，被害者に対する役割取得と傍観者に対する役割取得とでは，被害者援助行動の促進・抑制，傍観行動の促進・抑制に関して全く逆の影響を示した。

いじめ場面に遭遇した傍観者の中でも，被害者がどのような気持ちであるかを想像した傍観者は，“辛い思いをしている人がいる”と意識することによって，自身のおかれた状況を「援助すべき人のいる状況」として認識しやすいと考えられる。この認識によって，被害者援助行動が促進・傍観行動が抑制されるのかもしれない。

一方，他の傍観者がどのような気持ちであるかを想像した傍観者は，周囲の人々の存在を意識することにより，その結果“周囲の人が被害者を助けない理由が何かあるのではないか”，“自分が被害者を助けなくても責められることはないだろう”と予想し，それによって自身のおかれた状況を「援助の必要な人はいるが，援助を行わなくても問題ない，もしくは援助を行うことが問題である可能性のある状況」として認識しやすいと考えられる。この認識によって，傍観行動が促進・被害者援助行動が抑制されるのかもしれない。

以上をまとめると，傍観者のいじめ関連行動は，“自身がおかれた状況がどのような状況であるか”という認識によって影響を受けている可能性がある。

いじめ集団の変容過程を検討した橋本（1999）は，傍観者が加害者よりもむしろ被害者に対して親近感を抱いている方がいじめが深刻化する危険性が少ないことを指摘しているが，本研究の結果をふまえると，ここで言う「親近感」は，その他者と同じような感情を感じているという意味よりも，その他者の気持ちが想像しやすいという意味に近いのかもしれない。

本研究の結果から示唆されるいじめ対策

ここまでの結果から，傍観者に対するいじめ対策として，被害者に対する役割取得を促し，傍観者に対する役割取得を抑制するという対策が有効であると言える。いじめ場面に遭遇したときに傍観者がいじめを抑制するよう促すためには，傍観者になりうる人々に対して，いじめの被害に合っている者の気持ちを想像するよう促すトレーニングが必要であろう。しかし，その際に積極的に援助を行わない者が周囲にいることや，その者達が援助しない理由等を呈示することは，かえっていじめの傍観行動を促進する可能性があるため，避けるべきであろう。

本研究の限界と今後の課題

本研究では，傍観者によるいじめ抑制を促す対策を充分に明らかにするにあたっては，いくつかの課題が残された。まず，役割取得がいじめ関連行動に影響を及ぼすまでの過程には，自身がおかれた状況がどのような状況であるかという認識が介在することが示唆されたが，この点に関しては考察するにとどまった。今後はこの点に関して実証的な検討が求められる。

次に，本研究においては観衆に対する共感とはやしたて行動とがいじめ場面において生じないという結果が得られたが，このような結果は本研究において扱ったいじめの種類が「無視」であったためであるかもしれない。いじめにはこの他にも「からかい」，「悪いうわさを流す」等の種類があることが明らかにされており（本間, 2003），このうち特に「からかい」は内容によっては被害者が嫌な思いをしていても，“ほんの冗談”，“わるふざけにすぎない”と捉えられやすく，傍観者がその後はやしたて行動をとることも予想される。このような場面下では，「からかい」をはやしたてる観衆に対しても共感が生じる可能性がある。そのため，今後はいじめの種類の多様性を考慮した研究が求められる。

さらに，本研究で用いたいじめ場面のシナリオにおいては，被害者と加害者を普段から仲の良い関係であると呈示したが，それ以外の観衆や傍観者，また調査対象者自身に関してはいじめ場面における登場人物との普段の関係について特に言及しなかった。いじめ場面における登場人物である加害者や被害者，観衆，傍観者の 4 者間の普段の関係や，それら 4 者と調査対象者自身との普段の関係によって，各対象に対する役割取得や共感，いじめ関連行動の生じやすさは異なるかもしれない。今後は調査対象者自身も含めたいじめ場面における登場人物間の普段の関係についても考慮した研究が必要であろう。

引用文献

坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差　社会心理学研究, **11**, 105-115.

Batson, C. D., Duncan, B. D., Ackerman, P., Buckley, T., & Birch, K. (1981). Is empathic emotion a source of altruistic motivation? *Journal of Personality and Social Psychology*, **40,** 290-302.

Davis, M. H. (1994). *Empathy: A Social Psychological Approach.* In Boulder, Colo.: Westview Press. (菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学　川島書店)

橋本摂子 (1999). いじめ集団の類型化とその変容過程―傍観者に着目して―　教育社会学研究, **64**, 123-142.

Hodges, S. D. & Wegner, D. M. (1997). Automatic and controlled empathy. In W. Ickes (Ed.), *Empathic accuracy.* New York: Guilford Press. pp.311-339.

Hoffman, M. L. (1990). Empathy and justice motivation. *Motivation and Emotion*, **14**, 151-172.

本間友巳 (2003). 中学生におけるいじめ停止に関連する要因といじめ加害者への対応　教育心理学研究, **51**, 390-400.

熊谷　隼 (2006). いじめ被害者への否定的評価に関する要因分析―シナリオを用いた質問紙実験―　東洋大学大学院紀要, **43**, 35-54.

松尾直博 (2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向―学校・学級単位での取り組み―　教育心理学研究, **50**, 487-499.

森田洋司・清永賢二　(1994).　新訂版　いじめ　教室の病い　金子書房

大坪治彦 (1999). いじめ傍観者の援助抑制要因の検討 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育学部編, **50**, 245-256.

大野俊和 (1996). 被害者への否定的評価に関する実験的研究―「いじめ」の被害者を中心として―　実験社会心理学研究, **36**, 230-239.

清水貴裕・瀧野揚三 (1998). いじめの加害者に影響する被害者と第三者の反応　大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, **46**, 347-363.

杉田明宏・若松養亮・杉山弘子・菊地則行・片岡　彰・菊池武剋・寺田　晃 (1989). 中学生のいじめに対する態度とその背景―対人関係からのアプローチ―　青年心理学研究, **3**, 29-38.

竹ノ山圭二郎・原岡一馬 (2003). いじめ状況想起におけるいじめ判断についての立場間比較　久留米大学心理学研究, **2**, 49-62.

登張真稲 (2005). 共感喚起過程と感情的結果，特性共感の関係―性の類似度，心理的重なりの効果　パーソナリティ研究, **13**, 143-155.

塚本琢也・田名場忍 (2007).　いじめ場面における第三者の傍観・仲裁行動の発生・抑制要因の探索的研究　弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, **4**, 19-29.